

夜半の寢覚卷二後半部に於ける 主要脱文箇所について

鈴木弘道

夜半の寢覚卷二後半部とは、前田本以外の原作系諸本卷二の大体後半部を便宜的に呼称したもので、この部分は、改作本の中村本・神宮文庫本卷二のおよそ前半部の内容に相当するが、男女主人公の密通事件を察知した、女主人公の姉大君や弁の乳母の非難に堪へかねて、男主人公が女主人公の侍女少将を自邸に迎へ、広沢行を控へてゐる女主人公を事前に奪取せんとする計画を語る、といふ辺りから、流布本卷二の終末近くに見える錯簡のある箇所(註二)の直前までを一応の範圍として、以下、その間に於ける諸本共通の主要脱文につき考察しようと思ふ。

〔一〕まづ右の範圍には、少将が男主人公からの手紙に対して何の返事もしない、といふ条があり、今、流布本と改作本とを掲げると次の通りである。

ほろ／＼とこぼれて、「さだにいとゞむせかへりて、よし、さ思はゞ、えもて離れじ。これをだにおもひ給はゞ、えもてはな心安く見んと、思ひやらじや。」
れ給はじ、これも契おほししらと、頼もしく思し成て、
れてなど、たのもしくぞおぼえ

夜半の寢覚卷二後半部に於ける主要脱文箇所について

かのこと、今日明日のほどに給ふ。『日にそへてうさのみまも、世のう(サ)かき(ト)め見えぬ山路(サトセ) なんとつね出たる。
と言ひやり給へど、日に添へて憂せ(とマセ)のみ増る世なれば、
なにの哀もまた(マシ)めて(セ)、御返もせず。怪しく覺束なしと思す。
（一二七頁）

とてまかくてもとぞおほしりたる。〔上一二二・一二三頁〕
兩者の内容はほぼ同様であるが、記述の仕方には大きな差異があつて、流布本のAは中村本に見えず、また中村本のBは流布本に見えない。このことについては、かつて詳細に論じたことでもあるので、ここでは結論だけ記すと、中村本にAの見えないのは、その省略による簡略化と解し得られ、流布本にBの見えないのは、流布本の

「怪しく覺束なしと思す。」以下に、Bの内容に当る文、——少将が男主人公の心中を推察する詞を、男主人公の乳母が男主人公に告げ、それを聞いた男主人公が悲歎のあまり詠歌する、といふやうなもの——が脱落してゐることによるものと想像されるのである。

〔二〕 広沢に於ける女主人公の生活の一端を描いたところは、流布本と中村本とで、次のやうにかなり違つてゐる。考察の便宜上、その少し前の文から引用する。

御(ま)覽(ま)ぜ(ま)させ侍ぬれば、
ありとだにきゝてしなぞとお
もふ世をうきにこりと(すま)
や人につぐべき

たゞとばかり、筆にまかせて、
つゝみなく(せ)はしり書たるを、
めざましく見給ひて、なか御
身づから見給ふまじきと思す。
さすがに姨捨山の月は夜更るま
ゝに澄み増る(せ)を、珍しくつ
く(く)と(四字つ)と(サトセ)見出し
給ひて詠め入り給ふ。

有しにもあらずうき世にすむ
月の影こそみしにかはらざり
けれ

そのまゝに手触れ給はざりける
箏の琴引き寄せ給ひて、掻き鳴

「御覽ぜさせ侍れば、
これはさはこの世のほかのす
みかまで又うかるべきことの
葉ならむ」

とかきたるをもてまいりたれ
ば、みづからのたまふまじきと
おぼす、ことほりなれども、う
らめしくてうちなきたまふ。
Aひろさには、神無月のころな
れば、うちしぐるゝ空のけしき、
おもふ事なき人だに、そごろに
ものがなしきに、あらしの山の
ふもとなれば、風にしがたふ紅
葉のいろく、あわれにながめ
くらし給ふに、しぐれはれゆき、
をぐらの山の月くまなきに、あ
りし夢のこゝち、よるはそらの

し給ふに、所が哀増り、松風
ひかりもしらず、涙にのみしづ
みておはせしに、おきあがりて
見給へば、庭のけしき、ちぐさ
のしもがれゆくに、あるかなき
かにかのこるむしのねまでも、め
にさいぎりみゝにとどまるあは
れつきず。

ありしにもあらずなりゆく世
なれども月ばかりこそむかし
なりけれ
このほどはてもふれ給はざりし
さうのことひきよせて、かきな
らしたまふに、所がらにやあは
れまさりつゝ、松のあらしもか
よひたれば、御こゝろすみまさ
りて、きく人もあらしとおぼし
て心とどめてひき給ふを、
(一二七・一二八頁)

これにつき、鈴木一雄(註五)氏は、流布本の「さすがに姨捨山の月は……」の前に、Aにあたる原文が脱落してゐるのではないかと疑はれ、またBは、原作になかつたものを新しく補入した文であらうと考へられた。したがつて、流布本に於ける脱文はあくまでもAにあたる原文のみといふことになり、氏はその理由として、流布本の「さすがに姨捨山の月は……」の場面が、その前文の場面と比較してあまり

にも突然すぎる転換であることを挙げてをられる。これはまことに眞聴すべき御意見で、私も賛成したいと思ふが、それでは、中村本のみに見えるCは中村本の補入と見るべきであるか、それとも、Cに当る原文が流布本に脱落したものであらうか。

流布本の「さすがに姨捨山の月は……」の場面の前の部分は、女主人公が男主人公の知らない間に広沢へ渡つてしまつたので、男主人公は恨めしくて、女主人公に宛てて手紙を遣るが、それに対し、少将が女主人公に代つて走り書きした返事を男主人公が見る、といふところで、この大体的内容は中村本も同様である。男主人公としては、この場合、女主人公の書いた直接の返事を期待してゐたにも拘らず、女主人公の歌は記されてゐたにしても、女主人公ならぬ少将の代書した返書であつたことは、非常な精神的打撃であつたに違ひない。殊に、男主人公は今まで女主人公や女主人公の女房達からすげなく扱はれたことが多く、その度に男主人公は相當な打撃を蒙つてゐるやうである。さうでなくとも男主人公は、女主人公を思慕して涙することもしばしばであつた。このやうな場面がいかなる筆致で描写されてゐるか、次に主要な場面の原文を掲げてみよう。

(1) 女君(大君)のいと気高く恥しき様したるを見るにつけても、「女主人公ノ姿ガ」思ひやられて、ともすれば涙ぐましく静心なくて、ひとまには仲障子のもと立離れず。(中略) 心は空にあくがれて、涙こぼるゝ折のみ多かるを、(下略)

(2) 「男主人公ハ」対にい(ナシ)とわりなく紛れおは(セ)して、

月頃思ひ煩ふ心の中を、涙に浮き沈みつゝ言ひ聞せ、明暮は

夜半の寢覺卷二後半部に於ける主要脱文箇所について

御文を暇なく書きおこせ給へど、(中略)さりとうけとり、哀をかけても、何のかひ有べうもあらぬ物故、ものゝ聞えいみじう煩はしかるべければ、あらかは(トセ)ぬ物から、「対ノ君ハ」うけひくそら(マサトセ)なし。「男主人公ハ」ことわりに恨みやるべき方なく、(中略)互にかゝる契の(マシ)前の世まで恨めしきに、(中略)明暮(サトセ)わぶる気色もて隠せど、いかゞ人も思ひ咎めざらん。(四五・四六頁)

(3) 「などは(マ)いとあさましくはもてなし給ふ。(中略)など、「男主人公ハ」うちかすめつゝたゞ今いかで居給ひつらん、御簾引あけても入り(セ)なまほしく鎮め難きに、涙ぞこぼれぬる。(中略)「対ノ君ハ」今日はよるづのつゝましましさも思ひ消ちて御かへり(サトセ)聞ゆ。

人しれぬ袖のみいとどそぼつるはよをへ(トセ)る浪の名残成けり

清げに書(トイ)たるを、「男主人公ハ」見知りけり。」と、めづらしきに、「まして「女主人公」みづからのと見(トセ)ましかば。如何ならん(ト)ときひとくだりにても見ん。」とぞ思ひくんじたる心地なるや。(五〇頁―五二頁)

(4) 対の君の今宵のあさましき(トセ)を言ひやり給はず泣くゝ、(中略)ひたぶるにあれだち給ふ「男主人公ノ」気色に、「少将ハ」聞えん方なければ、(中略)「男主人公ハ」枕の下は海士も釣する(サトセ)ばかりに浮びあ(セ)して、対の君(サト)の昨夜の心の憂くあさましく、此世ならざりしを、ひたすらに思ひ成ぬるよし、陸奥紙に(サトセ)七八枚ばか

り(サトセ)、つきもせずつ(セ)くして、(中略)「対ノ君宛ノ文

ノ」中なる「女主人公宛ノ」御文を「対ノ君ハ」引き解きて、
哀知らん人に見せまほしけれど、(中略)「対ノ君ハ」我御

かへりごと(サトセ)のかがりを、例のおしはなち、言少に書
かれたるを、「男主人公ハ」「心やましく(マシ)見るか(二字ナ)

ひなし。」と見給ひて、いさゝかおなじ心に露の言をか(マシ)は
ず人はなし。我御心は富士の峰、浅(セ)間の嶽よりもこがれ

増る(二字ト)。「事の様(ト)はげにいみじく便なし。如何に
言ひやりすべき事にか。」と、「男主人公ハ」起き臥し歎き侘

(ト)びつゝ、(六三頁一六六頁)

(5) 一夜の名残、人ま(セ)に影につきて窺ひ給ふ気色のいと
みじく煩はしければ、露のひまあるべくもあらず。中の障子

も上の渡り給はぬ(三字ナ)折ならでは、つとかけ固めて、
いさゝかの風のまよひも有べくもあらずのみもてな。せば、

「男主人公ハ」いみじく心憂けれど、げにそれも道理なれば、
夜は寢覚め、昼は詠めくらしてのみ過(サトセ)し給ふ気色、
(六八頁)

(6) 「男主人公ハ」いみじうなごめおこつり、恨み給へど、い
とわりなし。「女主人公ガ」此方におはしまさばこそあら

め。」と「少将ハ」言ひて動くべくもあらず。(一三八頁)

(7) わくらばにうちしのびふりはへ給ふにはた、「女主人公ハ」
猶京に出で侍なんにを。入道殿のかけてもおぼし寄らざ

んめるに、うち驚かれ給はん御心の、よそ(サトセ)人より
も恥しく侍るべければなん、唯御消息(サトセ)などにて、

此程のおとろかさ(五字おほつかなきはマ)明らめさせ給へ。

とのみ、いさゝか(セ)は／＼しげなる気色もなく、うらも
なげに書き出でつゝ、(中略)過しやり給へば、「男主人公

ハ」言はん方なく歎き恨(ト)みつゝ、行帰り給ふをことにて
日頃も過ぬ。(二七四頁)

(8) 「男主人公ハ」御文(サトセ)日々立返り十枚ばかりに、た
ち返りおこたりを書つ(ト)い給へど、御かへり(三字返マ)

をその事もかけず、いと言少な(セ)。「今出で侍りて、みづ
から。」とのみぞあ(ト)るに、言ひやる方なく、「我心の過に、

妬く、悲しく、悔しき事(サセ)のみぞ数知らず、(中略)世の
中いとあぢきなく、世の誹、ものゝいとほしさも知るべき心
地もせず。(二七七頁)

(9) 言付けて恨めしき人の御文の暇なきにも、かく例ならぬ御
心地とのみ言付けて覚束なきを、「唯返事せじとの給は(マ

サト)す(セ)なめり。」と、「男主人公ハ」つらう悲しくのみ思
ひ聞え給ひて、「あまり人にくゝきはたか(二字ナ)なる御もて

なしなりや。かく(ハ)見奉らざりつる御心を餘りになれ
ば道理。」とのみ心得思すに、(二八二頁)

(10) 中々にみるにつけても身のうさの思ひしられし(四字知
夜はの月影(れしト)

とのみあるを、うちも置かず見居給へり。(三五四頁)

これらの場面につき、主要事項と男主人公の主要な状態を一覽表
に纏めると、次のやうになるであらう。

〔第一表〕

(4)		(3)		(2)	(1)	場面	主要事項	男主人公の主要状態
(ロ)	(イ)	(ロ)	(イ)					
男主人公は女主人公と対の君宛に手紙を遣るが、対の君の無愛想な返事しか来ない。 <small>(註七)</small>	女主人公のもとに忍び入った男主人公は少将や対の君に追ひ出される。	男主人公は女主人公宛に手紙を遣るが、対の君から返歌がある。	男主人公は病気の女主人公を見舞ふが、女主人公附の女房達から冷淡な取扱ひを受け、女主人公に逢ふことができない。	男主人公は女主人公宛に手紙を遣るが、既に、女主人公附の女房である対の君からも相手にされない。	男主人公は女主人公に逢はうとしても不可能である。			男主人公の主要状態
○「起き臥し歎き侘 <small>(ト)</small> びつゝ、」	○「泣くく〜」 ○「ひたぶるにあれだち給ふ」	○「思ひくんじたる」	○「涙ぞこぼれぬる。」	○「明暮 <small>(ハ)</small> サトセ <small>(マ)</small> わぶる」	○「ことわりに恨みやるべき方なく、」 ○「互にかゝる契の <small>(マ)</small> サシ前の世まで恨めしきにい、」			

夜半の寢覚巻二後半部に於ける主要脱文箇所について

(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)
女主人公は男主人公に返歌する。	男主人公の手紙に対する女主人公の返事に誠意が見られない。	男主人公は女主人公宛に何度も手紙を書くが、その返事は言少なである。	女主人公から男主人公宛に手紙があるが、男主人公は、直接女主人公に逢ふことができない。	男主人公が女主人公に逢ひに来るが、少将は女主人公の不在を言ひ張つて、逢はせない。 <small>(註八)</small>	男主人公は、女主人公に逢はうとしても、警戒厳重なため実現できない。
○「うちも置かず見居給へり。」	○「つらう悲しくのみ思ひ聞え給ひて、」 ○「道理。」とのみ心得思すに、」	○「世の中いとあぢきなく、世の誹、ものゝいとほしさも知るべき心地もせず。」	○「言はん方なく歎き恨 <small>(ト)</small> みつゝ、」	○「いみじうなごめおこづり、恨み給へど、」	○「いみじく心憂けれど、げにそれも道理なれば、夜は寢覚め、昼は詠めくらしてのみ過 <small>(サ)</small> すぐ <small>(マ)</small> し給ふ」

更に、これらを大きく三つの類型に分類した表を掲げる。

〔第二表〕

Ⅲ	Ⅱ			Ⅰ	類型	主要事項	場面
	Ⅱ'''	Ⅱ''	Ⅱ'				
女主人公から男主人公宛に手紙があるが、直接女主人公に逢ふことができない。	紙を遣る。	男主人公は女主人公宛に手紙を遣る。	女房代返。	反応なし。	男主人公は女主人公に逢ふことができない。		(1)・(3)の(1)・(4)の(1)・(5)・(6)
		女主人公の誠意のない返事。	女主人公				
(7)	(8)・(9)・(10)	(3)の(ロ)・(4)の(ロ)					

類型Ⅰに相当する場面では、男主人公は悲歎の涙を流すことが多く、また、特に(5)では、男主人公が相手の出方をもつとものことだとして反面是認し、(6)では、恨む態度が見られる。ところが(7)では、男主人公は悲歎に暮れるとともに相手を恨めしく思つてゐるから、類型Ⅱは実際には類型Ⅰの変形したものと考へられよう。とにかく、類型ⅠとⅡとを見るならば、種々の障碍のために女主人公には容易に逢ふことのできない男主人公の状態が、いつの場合にも類似してゐることに気づくのである。このことは類型Ⅱに於ても知ることが出来る。即ち、男主人公の文に対する何等かの返事が女主人公方からあつてもなくても、男主人公は恨めしく悲しく思つて意氣消沈する一方、相手方の立場に立つてその行為を道理と判断することさへ

あり、やはりどの場面でも、男主人公の主要な状態に特別の差がないやうに思はれるのである。私は、以上の場面を検討することによつて、寢覚作者の筆癖と覚しきものが、ある程度探り得られるのではないかと思ふが、果していかであらうか。

さて、先に掲げた、脱文の有無の問題となつてゐる場面は、その内容を考察して、明らかに類型ⅡのⅡ'に分類することができるであらう。しかも、中村本のCの部分は、女主人公が直接に返事を書かずに少将が代書したことに對して、男主人公はそれをもつとものこととは認しつつも、恨めしく思つて泣くことを述べてゐる。ところが、類型ⅡのⅡ'に相当する場面(3)の(ロ)でも、男主人公は對の君の返歌が女主人公自身のものであつたらよいのと思ひくづをれてゐるし、(4)の(ロ)でも、對の君の無愛想な返事に対して起き臥し歎き侘びてゐるのである。更に、前述のごとく、類型Ⅱの場面では、男主人公の主要な状態に特別の差がない、といふことを考慮すると、中村本のCの部分はやはり中村本独自の補入と見るよりも、Cに當る原文が流布本に脱してゐると見るべきではなからうか。Cの「ことほりなれども」「うらめしくて」「うちなき」に相當する語は、それぞれ(2)(5)(9)の場面、(2)(6)(7)の場面、(1)(2)(3)(4)の場面、に用ひられてゐることも、右の傍証になるかも知れない。もつとも、中村本が(1)より(10)までの場面を参考に、類似語を以て挿入したのではないかといふ疑問も起らないでもないが、類型Ⅱに於ける、男主人公への返事の次を見ると、必ず男主人公の主観的描写のほかに客観的描写があるから、やはり客観的描写と見られる中村本のCに當る文が、元來、流布本にあつたものと考へてよいのではないだらうか。

〔三〕 男主人公が広沢の女主人公を思つて手紙を遣るところに、

常よりも時雨(二字し)明したる
翌朝、大納言(殿)より、
つらけれど思ひやるかな山さ
との夜はの時雨の音はいかに
と (一三四頁)

つとめて、つねよりもしぐれあ
かしたるに、大納言殿より、
「袖ぬらす夜半のねざめのむ
らしぐれうき世のほかはいか
ゞきくらん
たえずのみなきくらしでも、空
もとぢたるさよの時雨に、夢だ
にも見ぬかなしさ」B などかき
て、少将のもとへつかはしたれ
ども、御らんじもいれず。
(一二九頁)

とある。ところが、流布本ではこの話はここで切れて、次に新しく、

A (言マ) かき暮したる日、思ひ出なき古里の空さへとぢたる心地
(サト) して、さすがに心ほそければ、端近くのざり出で、白きみ
(御マサ) 衣(セ)もあまた、なか／＼色々ならんよりもをかしく、
懐しげに着なし給ひて、詠め暮し給ふ。一年、かやうなりしに
(「なかもくらし」) 以下十五字程ナシマ (大納言の上と端近ト) くて、雪の(サトセ)、山
作らせて見し程など思し出るに、 (一三四・一三五頁)

といふ、雪の日に於ける女主人公の様子を描写した文に転じてゐる。
したがつて、ここは、時雨の日と雪の日との二つの異なつた場面が
続いてゐると見なければならぬのであるが、不思議にも、中村本
には、雪の日の場面に於ける一部の文が混入してゐるやうに思はれ

夜半の寝覚卷二後半部に於ける主要脱文箇所について

る。即ち、中村本のAは、流布本のA'と類似した表現で、Aは恐ら
くA'から暗示を得たのではないかといふやうな文になつてゐる。も
ちろん、Aは「さよの時雨」、A'は「(言マ)」とあり、更に、Aの
「かなしさ」は男主人公の、また、A'の「心ほそければ」は女主人
公の、それぞれ主観を表現する語であるから、その場面は両者全
く異なり、しかも、中村本にはBのごとく、流布本に見えない内
容の文まで記されて、そのまま流布本の「一年、かやうなりしに
(「なかもくらし」)」以下に該当する「雪ふりつもりたるに、ひと／＼せ」
以下に続くのである。このやうな両本の差異は一体何に基づい
てゐるのであらうか。鈴木氏は、流布本に見えないA Bが中村本に
記されてゐることにつき、

原作が和歌で打切り、余情に托した個所を、消息文を加へ、事
情を明らかにするために拡大補入したものである。

と断定されたが、これは、取りもなほさず、原作の「つらけれど」
の歌の次には、最初から全然文章がなかつたといふお考へを表はす
もののやうである。

しかしながら、それにしては、流布本の「常よりも」以下「つら
けれど」の歌までの文が極端に短かくて単調過ぎる嫌ひがあり、こ
のやうな例は、現存の流布本寝覚全巻を通じてほかに見ることはで
きない。しかも流布本寝覚に於ては、例へば、

○ 天の原雲の通ひ路とぢてけり月の都の人もとひ来ず
と(ナシマ)、暁の風に(セ)合せて弾き給へる音の、(下略)

(五頁)

○ 忍ぶれどおもかげ山の面影はわが身をさらぬこゝちのみ

して

などかくしも思ふべき。」と、(下略)

(一八頁)

などのやうに、歌の次にはほとんど定まつて、その歌やその場面に關係ある何等かの文が続き、歌の部分でその場面がぶつつりと切れてしまふやうなことはまづ見当らないと言つてもよいほどである。次のやうな場合でも、一見、場面が歌で終つてゐるやうであるが、よく考へてみると決してさうでないことがわかる。

(a) 書きもやらず涙か(マ)けつゝ、

わくらばにながれあふせ(ト)を涙のみいひやるかたもな
くてやみにし (六四頁)

(b) 今の間もうしろめたければ御文書き給ふ。

みくさゐし野中の水を結びあげてしづくにゝごる今のわ
びしさ (二一四・二一五頁)

(c) 哀げに(ト)こま(ト)かにて、

まして思へさ月の空のやみにさへかきくらされてま
と(ハ)心(マ) (二六四頁)

(a)の歌は、男主人公が女主人公に宛てて書いたもので、この歌の次は、女主人公のもとに姉大君や父大臣がやつて来る場面に転換するが、すぐそれに続いて、

「対ノ君ハ」此御文(右の「わくらばに」の歌)を取り入れて
見るに、「いとかくわ(ト)づらはしからず、つゝましからぬこ
とならば、哀も忍ぶべくもあらぬ御書き様、言の葉かな。」と、
打かへし／＼見るに、(下略) (六五頁)

と、(a)に關聯した場面が現れてゐる。(b)の歌も、女主人公に対する

男主人公の歌で、このままこの場面が終了するやうに見えるけれど、引続いて、

女君はいとゞ物恥しさをさへ添へて、今日は督の君の御行方と
(ト)知らずあ(リ)つるまゝに、やがて埋もれ臥し給ひて、
御かへり(三字返)も(セ)聞え給はず。 (二一五頁)

といふ文があり、傍線の箇所は特に右の歌と關係あることを示してゐる。(c)の歌は、大姫君から来た懐しい手紙に対する女主人公の返歌であるが、これに続いて、宮中の女主人公のもとに退出した雅子君と女主人公の物語る場面が現れてゐるから、これこそ純粹に場面転換の境界を形作つてゐるかのやうである。ところで、この返歌の内容からしても、女主人公がいかに大姫君を恋しく思つてゐたかを容易に伺ふことができるのであるが、たまたま大姫君と同じ血縁の雅子君が、女主人公のもとにやつて来るといふ場面は、決して右の返歌と無關係な場面であるとは言ひ難いのであるまいか。なほ、雅子君の容姿につき、

いみじく貴にをか(ト)しくなまめきたる容貌さまは、姫君(大
姫君)にも劣り聞えず、 (二六四頁)

といふ、大姫君と比較した文が見えるし、また、女主人公が雅子君の参内するのを引き留めてともに語り合ふのも、大姫君に対する恋しさを紛らはさうとする心の現れであつたことが、次のやうに記されてゐるのである。

「何かは参り給ふ。暫しはかく(二字)て見え給へかし。」とて
(二字)姫君(大姫君)の恋しくおはする慰めに(ト)さ(ハ)言
へ(ト)ど身に添ひて生ひたちし方の睦まじさも、故殿の限なき物

におほい(七)たりし事をさへとり集め、こ(七)まやかなる事は添ひて打語りひ給へる。(二六五頁)

これらによつて、右の歌を境とする両場面は、人物の上では確かに大姫君から雅子君へと移動してゐるが、女主人公の子女に対する心境の点で密接な関係があると言ひ得るであらう。

以上の例から想像すると、流布本の「つらけれど」の歌と「(七)かき暮したる日」との間には、本来、この歌に閑聯ある何等かの文が記されてゐたものではないかといふ疑を抱かざるを得ないのである。

次に、私はかつて、中村本の改作法の一つに「混淆法」のあることを述べたことがあるが、これは、原作に少くとも二箇所類似の内容を表現する文がある場合、中村本が、しばしばこれらをもつて内容として簡略化するために採つた一手段を仮りに名づけたものである。もつとも、この混淆法によつて、原作とはやや異なつた表現となつてしまふこともあり、これについても既に実例を示しておいた。ともあれ、混淆法の場合には、原作の二箇所が類似した内容であることを必要とするわけであるが、あたかも流布本の「つらけれど」の歌は時雨の日に於ける詠歌であり、それに続く場面は雪の日の描写であつて、両者は天候の上ですこぶる似通つた自然現象を背景としてゐる。一方、中村本は、前述のごとく流布本のAに暗示を受けて記したやうなAと、それを受けるBを「袖ぬらす」の歌に添へてゐるが、時雨の日の場面と雪の日の場面が天候上類似してゐることを考へると、どうやら、Aは混淆法の手段を以て、巧みに簡略化されたものではないかといふ感を強くする。したがつて、私は、

流布本の「つらけれど」の歌の次には中村本のA Bに該当するやう

な文が、むしろ脱落してゐるものと想像するのである。

更に、中村本が拡大補入の手段による改作法を使用してゐる場合は、大体に於て、その場面自体のみに関する拡大補入の法が採用され、それに引続いて現れる場面とは何等の交渉もなく単独に行はれてゐるやうである。例へば、流布本に、

暁の風に(七)合せて弾き給へる音の、いふ限りなくおもしろきを、大臣も(マシ)驚かされ(ナシ)て、「珍かにゆゝしくかなし。」と聞き給ふ。

此君に姫君に(トセ)今五ばかりが年上に物し給へば、ことゝ大人び(セ)給ひ(マツセ)に(ナシ)たるを、「如何にもてなし聞えん。」と、(五頁)

とあるが、中村本には、

ふくかぜも雲のうへまでゆくべくは、つげこせがほにひきすまし給へるびわのね、いふかぎりなくおもしろきに、おとゞもおどろき給て、めづらかにいみじうかなしとおほして、わがこにあらじ、あまつをとめなどの、かりにやどり給へるにやと、なよ竹のかぐやひめのこともおほしいでられ給て、うつくしき御かたちありさまにも、めみいれきこゆる物やあらん、いとこれ程なくてもなどなかりけん、とまでぞおほしなげきける。かくてふたりのをんな君を、いかにかさだめきこえんと(上一頁)

とあつて、傍線の箇所は明らかに拡大補入の文となり、しかもそれは流布本の「此君に姫君に(トセ)」以下の場面とは全く何の関係も見られず、ただ単独に、大臣の心境を流布本よりもなほ具体的に拡

大補入したに過ぎないのである。また、流布本に、

御祈の驗有とも見え侍らざるを、さてや心み給ふべき。」と
申給へば、 (八〇頁)

とあるのに対して、中村本では、

御いのりはしるしありとも見え侍らぬに、いし山にこめまいら
せてこゝろみ侍らばや。このてらは、(中略)しばしこめたて
まつりてこゝろみ給へかし」と申給へば、(上七六・七七頁)

とあり、傍線の箇所で石山寺の縁起を長々と補入してゐる。これも、
女主人公が石山寺に移らうとする場面であるため、中村本は、単独
にそれに関する拡大補入を行ったもので、次に続く文からは何の暗
示も得てゐない。したがつて、中村本の、このやうな拡大補入手段
の特色を顧みると、前掲の流布本のAに暗示を受けてゐるAが、拡
大補入したものであるとは俄に考へ難く、このことは、流布本の
「つらけれど」の歌の次に脱文があるのではないかといふ想像を助
けるやうにも思はれるが、いかがなものであらう。

[四] 最後に、脱文があることについてはやや疑問に思はれる箇所
を検討しておきたい。

父入道の住む広沢に移つた女主人公を、入道が種々心を配つて慰
める条に、

「若き女房達 ^A (^{ウチ} セ)などはかく	わかきねうぼうども、よばなれ
世離れたる御住家を、心細く侍	たるすみかは、ありにくゝおも
らすなど、あさはかに仇し心つ	ふらんとて、 ^B くき木、水のなが
く ^セ (^{ナシ} らん)と思せば、局な	れたるつばね ^B の [〃] 有さまま

ど心止めて、をかしきやうに皆
で、こゝろをつつくしてなぐさめ

しなさせ給ふ。はかなき木草の^{B'}
もとをも、水^(トセ)(^ノマサ)ながれ
も^(マ)もてあそばせつゝ、つれ
[〃]を[〃]も心をなぐさめさすば
かりにと、御戒行をもうちやす
めつゝ、下り立ち、見処ありて
しなさせ給ふ。B''「心にまかせて
遊び戯れして侍ひよかりぬべ
く、君のいといたく屈指給へる
御心をも『世の憂きよりは。』
と思し慰めさせん。」と、はか
なき事につけてもてなし思し
たるを「女主人公ハ」見るに、
いみじく哀なれば、我も憂かり
し古里よりは、少し世の常に暗
々しくもてなし給ひたれば、女
房達もむづかしかりし心を慰め
て、心安く皆侍ひつきたり。

(一三一・一三二頁)

とあるが、流布本によれば、この文は大体次の三節から成つてゐる
やうである。

(1) 女主人公附の若い女房達が女主人公のもとを離れないやう
に、父入道はその局などまで趣あるやうに、とりつくるふ。
(2) それらの女房が楽しめるやうに、入道は前栽を美しく作る。

(上一二五頁)

(3) 女房達が居心地よくなるやうに、また、女主人公が心慰む

やうに、と入道が心を配つたので、女主人公は少し晴れやかなりになり、女房達も安んじて女主人公のそばに侍るやうになる。

ところが、中村本では、(1)(2)や(3)の前半を混淆して一節をなし、次いで女主人公の姉大君の心境を述べ、最後に(3)の後半と同内容の文を以て終つてゐる。中村本に於ける右のやうな混淆は、前述のごとく中村本にしばしば見られる手法であつて、これは(1)(2)および(3)の前半が酷似する内容であることに基づくものである。かくして、AはA'を、CはC'を、それぞれ改作したものであり、また、BはB'B''を混淆してきはめて簡単に叙したものと考へられるが、それでは、流布本には、該当する箇所全く見えない、中村本の「大なごんどのうへは」以下「心やすまり給ぬ」までの文は、一体どう考へるべきであらうか。即ち、これは中村本の補入と解すべきか、それともこの内容に該当する文が流布本に脱落してゐると見るべきか、そのいづれであらうか。

まづ流布本の文を一読して気づくことは、女主人公とその女房達に対する入道の配慮が「A'+B'」「B'」「B'''」のごとくあまりにも羅列的であり過ぎる文によつて叙述されてゐることである。そして、このことはどこかに脱文のあることも一応は豫想させる。しかし、寢覚の文章が、總体的に名文とは言へないことを考へると、かうした羅列的な文であつても、強ひてそれを脱文による結果であるとは見なし難い気持もないではない。したがつて、単にこのやうな叙述の仕方に注目することだけで、脱文があらうと推定することはいささか無理なやうにも思はれて来る。

夜半の寢覚巻二後半部に於ける主要脱文箇所について

次に、C'には「我も」といふ女主人公自身を表現する語が用ひられ、その下に気まづい思ひで姉大君と一緒に生活してゐたことを示す「憂かりし古里」の語が見えてゐるから、これらの文には、大君に関する意識が働いてゐたのではないかと考へられる。つまり、「我も」といふ語感はおのづから女主人公に対する「大君も」心が晴れやかになつたことを示してゐるやうである。さうすると、元來、その箇所以前のどこかに大君のそのやうな心境の変化を述べる文があつたのではないかと考へてみたくもなる。しかし、中村本では、大君の心境を表はす文として「大なごんどのうへは、かくひきはなれ給つれば、すこし心やすまり給ぬ」と明示されてゐるから、それに続く「此ひめ君も」以下の文も、極めて自然的な表現となつてゐる。

かくて、中村本のみに明示されてゐる「大なごんどのうへは、」以下「心やすまり給ぬ、」までの文は、一応、補入と見るよりも、むしろ流布本に、その内容に該当する文が脱落してゐるのではないかと推定してみたくもなるわけであるが、流布本に見えるC'の「女房達も」といふ語こそ、上の「我も」に対する語であると考へられなくもないから、もしさうであれば、右の推定も全く根拠のないことに終つてしまふ可能性は十分にあると思はれる。

ただし、最近、三谷栄一博士^(註三)は、中村本が、大君に関する描写をできる限り削除し、女主人公を浮き立たせようとする改作方法を取つてゐることに着目されたが、今、問題となつてゐるこの場面は、流布本にも見えない大君の描写がかへつて中村本に見えてゐるのであるから、その点で、これはやはり中村本が補入したものでなく

て、流布本に脱文があるのではないかと考へることも許されさうである。

以上、私は、この場面については、中村本の補入か流布本の脱落かを決定するには、なほ種々の疑問があり、今後の研究に俟つべきことを附言したまでである。

(註 一) 橋本佳氏編「校本夜半の寢覚」では、「弁の乳母の(ナシマ)心ゆきて、『あの御方の御(ナシ)格子、今宵(トセ)マサセ(サトセ)放ちまうけれつらん。』と、高やかに言ふが(セ)聞ゆれば、」(一二三頁)とある箇所。以下、原作系寢覚を流布本とし、本書を使用する。

(註 二) 一四一頁。錯簡については、黒田正男氏「夜半の寢覚卷二に於ける錯簡に就いて」(「国語」第二卷第二号所載)、高木東一氏「夜半の寢覚の錯簡に就いて」(「国語と国文学」昭和二十二年六月号所載)参照。

(註 三) 以下、改作本は中村本(古典文庫本)を使用する。なほ、上段は流布本、下段は中村本である。

(註 四) 小著「平安末期物語の研究」第一篇第四章第三節。

(註 五) 「神宮文庫本『よはのねざめ』について」(「国語」第

三卷第一号所載)

(註 六) 藤田徳太郎・増淵恒吉両氏共編「校註夜半の寢覚」一三三頁の註は、この「ありとだに」の歌を「中君の歌」とするが、その「和歌索引」には「女房少将」とする。また、鈴木氏も前掲論文で「少将」の詠とされてゐるが、やはり女主人公の歌と考へるのが正しいやうである。

(註 七) 「校本」は、「事の様(たま)」以下を男主人公の詞とするが、「校註本」や関根慶子・小松登美両氏共著「寢覚物語全釈」のごとく、「いさゝかおなじ心に」以下をその詞とすべきであらう。

(註 八) 少将の詞は、「いとわりなし。」以下と考へるべきであらう。

(註 九) 前掲論文。

(註 一〇) 前掲小著第一篇第四章第二節。

(註 一一) 前掲小著一〇四—一〇五頁・一一四—一一五頁。

(註 一二) 「物語の中世の変貌——中村本寢覚をめぐつて——」(「日本文学論究」第二十一冊所載)